

# ナイジェリア国からのケニア理数科教育支援 第三国研修視察を終えて

日下部 光  
JICA ナイジェリア事務所  
企画調査員(基礎教育)

西アフリカに位置し、1億2千万余というアフリカ最大の人口を有するナイジェリア(正式名称:ナイジェリア連邦共和国)は自他共に認める「アフリカの大国」である。石油・ガス等の地下資源を豊富に有しているにも関わらず、その資源の配分をめぐる争いは、大規模な経済混乱・政治汚職・治安悪化を招き、現在においても、様々な社会問題を抱えているのがナイジェリアの現状である。

1999年の民政移管により、日本政府(JICA)はナイジェリアへの援助を再開し、現在、「教育・保健医療・水供給」の3分野の支援を進めている。

## 1. ナイジェリアの教育が抱える問題点

ナイジェリアの教育セクターは、他のアフリカ諸国同様に、多くの問題を抱えている。その問題のひとつが、教員の質が低いということである。不十分な教職課程や現職教員訓練の欠如が主要な理由である。特に、1999年にナイジェリア政府が「初等教育の完全無償化」政策を実施したことにより、初等から後期中等教育にかけて就学者の増大が起こり、資格を持たない或いは十分に訓練を受けていない教員を大量に動員していることは懸念すべき教育問題である。そこでナイジェリア政府は、全国教員養成校委員会(NCCE: National Commission for Collage of Education)を主体として、現職教員再教育(In-service Training)を実施し、教員の質を高めることを図っている。しかし、資金不足やマネジメントの問題もあり、それらが全国的かつ効果的に行われているとは言えないのが現状である。

## 2. ナイジェリアにおける日本の教育支援について

JICA ナイジェリア事務所は、この問題に対応するために「教員の質の向上」を支援するプログラムの実施を検討している。教員の質の向上といっても、強化すべき点は多々あるため、支援するにあたり、何を切り口にするか、何をターゲットにするか、しっかりと定める必要がある。そして、そのターゲットは、ナイジェリア側のニーズを汲み取るだけでなく、日本が最も効果的に協力できるものは何かを十分に踏まえることが重要である。

現在日本は、過去の協力実績を踏まえて、理数科教育支援が、教育セクターにおいて日本の比較優位を保つものであり、その支援を一層進めてゆくという方針を定めている。サブサハラ・アフリカにおいては、JICA がケニア・ガーナ・南アで理数科教育支援プロジェクトを展開しており、今後、それらを拠点とした域内協力・域内ネットワークを進めてゆく予定である。中でもケニア SMASSE プロジェクトはその核となることが期待されている。

以上を踏まえ、私はナイジェリアに着任して以来、ナイジェリア政府、他の援助機関(世銀・UNESCO・USAID・DFID等)、そして教育支援を行うNGOの人々と、ナイジェリアにおける日本の教育支援の可能性について積極的に意見交換をしてきた。彼らからは「数学・科学教育には高いニーズがあり、もし日本がこの分野で比較優位があり、そしてやる気があるのであれば非常に効果的支援が出来るであろう」

というアドバイスを頂いた。特に、ナイジェリア政府(連邦教育省)は日本からの理数科教育支援に非常に高い興味・関心を持っていることから、今後、この分野での連携・協力を進めるに当たり、先ずはケニア理数科教育支援第三国研修にオブザーバーという形で参加し、日本の協力アプローチを「観察」をすることとなった。

### 3. 研修視察の目的

今後ナイジェリアが日本と教育協力を進めていくには、まずナイジェリア側が日本の教育協力・支援の理念を十分に理解し、それをナイジェリアの現実にどのように組み込み、生かしてゆくかを導き出すことが最も重要である。そのため、本研修視察の主目的は、以下の二点である。

- ① SMASSE が生み出した本研修の核である「ASEI/PDSI」という教授法(授業改造)の理念と実践を理解する。
- ② その教授法をナイジェリアの理数科教育分野においてどのように活用するかを議論し、具体的なアイデアを練り上げる。

この二つの目的を達成するために、1月19日から始まる計4週間の本研修の中で、ナイジェリアからの参加者は、第2週目と第3週目の計2週間、研修に参加をする。参加者の構成は、連邦教育省から2名、教育省傘下にある現職教員を含む教員研修を実施する機関である全国教員養成校委員会(NCCE: National Commission for Collage of Education)から2名の計4名である。私も最初の2日間だけではあったが、彼らに同行し、ケニアの研修の様子を視察することが出来た。

### 4. 研修に参加をしているナイジェリア教育行政官の様子

とにかく、ナイジェリア人研修生への定着したイメージといえば、授業開始時間に大幅に遅れてきても、反省はしない。その上、自分はアフリカの大国・ナイジェリアから来たという過剰な自信で、大声で長々と自説を繰り出すものの、人の意見はあまり聞かない。また時として他のアフリカ諸国の参加者を見下すような態度をとることがあるため、議論や雰囲気壊してしまう。この種の批判はどこへ行ってもよく耳にする(確かに頷ける)。

今回のナイジェリアからの参加者4名のキャラクターは、ナイジェリアでは「普通」であることから、上で述べた心配が絶えず付きまとったのが正直なところである。しかしながら、参加型をモットーにしつつ様々なバリエーションと細部まで工夫を凝らしている本研修の講義は、彼らにとって非常に新鮮だったようである。また、他のアフリカ諸国から参加している研修生の真剣な学習態度に影響されてか、自国の自慢話をするよりも新しい知識を学ぶことに全神経が向かっている状態のように見えた。特に、本研修を通して得た新たな発見や感動した話を真剣に語る姿を見ると、かなりのインパクトがあったようだ。

### 5. 今後のナイジェリア・ケニア連携の可能性

今後のナイジェリア・ケニア連携を具体的に進めるにあって、先ずはナイジェリア政府が、SMASSE-WECSA ネットワークの正式メンバーとなり、同ネットワークを通じた技術協力ならびに技術交換を積み重ねてゆくことであろう。ナイジェリアにも理数科教員支援を行う現職教員訓練制度があるものの、質に問題ありというのがナイジェリア側の悩みである。それを改善するために、SMASSE プロジェクトによって蓄積されたリソース(例えばケニア人専門家や教授法・教材開発のマニュアル

ル等)を、ナイジェリアの現職教員訓練の中に活用することも一案であろう。研修視察を終了した彼らが、どのようなアイデアを持ち帰ってくるのか楽しみにしている。

## 6. 研修視察を終えて

最後に、短期間ではあったが、私自身も本研修視察を通し、ナイジェリア人参加者に負けず劣らず多くの発見をした。その幾つかを書き留めておきたい。

一つは、プロジェクトにおける日本人専門家の意義を感じたことである。とかく、援助機関によるプロジェクトといえば、外国人専門家が「主役」となり、現地の人々をぐいぐい引っ張って行くというイメージを持っていたが、SMASSE プロジェクトでは、ケニア人スタッフが主役であり、日本人専門家がいい具合に「黒子」となっているように感じた。特に、プロジェクトのチーフアドバイザーである杉山さんが語った「ケニア人がある程度の技術を得たら、後は彼らに任せる。でも、ケニア人だけでは、時として間違った方向に進んでしまうこともあるし、彼らも自分の進んでいる方向に自信を持ってないときもあるので、その時に日本人専門家がケニア人スタッフと進むべき方向性について一緒に考え、確認をすることが重要」という言葉が印象に残った。

二つ目は、ケニア人スタッフが嬉しそうに SMASSE プロジェクトの効果を説明し、同時に自信を持って他のアフリカ諸国の参加者に身につけた技術を伝えている姿である。「南南協力」という言葉はよく耳にするが、その具体的な「形」を見ることができたような気がする。

三つ目は、研修場所が、政府より譲り受けた郊外の古い建物を利用して行われていたことである。援助機関が行う研修といえば、ホテルの会議室等を利用するケースをよく見かけるが、その姿は資金不足で悩むアフリカの現状とは掛け離れていて、私自身、絶えず違和感を持っていた。例え古くとも、既にそこにあるものを大切に使い、研修の内容で勝負をする SMASSE のスタンスに好感が持てた。

最後に、プロジェクトの技術顧問的存在である武村専門家より、技術協力を進める上での心得として「技術協力は人づくり、それは心と心の交流がベースにならない。アフリカ人はアフリカ人のリズムで行く。焦ってはいけない、彼らが出来ることを何かをじっくり観察し、実施に当たっては中心人物となる人を見つけ出し、核となる機関を築き上げてゆくことが重要」というアドバイスを頂いた。これは、SMASSE を支える人達の理念であり、私自身も今後のナイジェリアでの活動で励みになる言葉であった。

以上